一人っ子でも、愛されない

倉田紗緒里

「一人っ子は親から大事にされる」というのは本当だろうか。

私は昭和の後半、当時そんなに多くない一人っ子の家庭に育った。よく一人っ子は「大事に育てられたでしょう」とか「何でも買ってもらえたんじゃないの」と言われるが、親に育児能力がなくビンボーな家に生まれた私は、少なからずそうでは無かったことを強く言っておきたい。

別に暴力を受けたとか何日も食べさせてもらえなかった訳ではないが、一人っ子というわりには、親からの扱いが他の友達より少し軽かったと思う。そして発展途上国の子供から鼻で笑われそうな程度に、私は中途半端にビンボーな子供時代を送っていたのである。

たしか幼い頃は、家計も親との関係もわりと順調にいっていたように思う。私立の幼稚園に通っていたし、お父さんも単身赴任だったけれど幼稚園のイベントにはちゃんと来てくれていた。

なんとなく雲行きが怪しくなりだしたのが、小学校に入ってしばらくたったとき。理由もわからないままにお父さんと別居することになり、会うのは正月の時か下手をしたら一年以上お互いに顔を出さず、完全に育児の義務を放棄されていた。残りの家族であるお母さんとおばあちゃんも仕事で帰るのは遅く、学校から帰る時はいつも裏庭から家に入っていた。そして平日はそのまま快適

な（※おばちゃんがお菓子を出してくれる）友達の家に遊びに行くか、もしくは日が暮れるまで一人で壁にボールを当て続けるという、兄弟のいない子供特有の遊びを続けていた。

またお母さんは育児放棄がはなはだしく、朝も友達がむかえに来てくれてから私と一緒に起きる程だらしがなかった。私は三日間同じ服を着たままの時もあったし、一週間ずっと編みっぱなしのみつあみで過ごすこともあった。体育があった日に「おふろに入りたい」と言ったら「昨日入ったやん！」と驚かれ、女の子だろうが関係ないような育てられ方をしたと思う。

最悪なことにお母さんはパチンコにはまり、次第に帰宅時間が夜の十時や十一時を過ぎるようになった。私が遊びから帰るといつも家は真っ暗で、近所から漂うごはんの匂いをうらやましく思っていた。仕事が休みの土、日は「一時間だけ」と言って、私のごはんも置いていかずに八時間帰ってこないこともしょっちゅうだった。つたない文字で「パチンコはしゅう４かいくらいにしてね。」とお母さん宛てに書かれた、昔の私の手紙を数年後に見つけた時は自分でも少しせつなかった。

毎日好き勝手に放り出され、私は当然親の言う事を聞くはずもなく、一人っ子に拍車をかけて自由気ままに育っていった。同時に頼りになるのは自分だけという自立心が芽生えはじめたのもこの頃である。

親の帰りは遅いものの、調理実習も経験していない子供は非力なもので、おなかがすくと台所にある食べ物をあさるというネズミみたいな事をしていた。お餅や粉末スープがある時はまだいい方で、パチンコの余り玉でもらったらし

いアメやグミのほか、海苔やかつおぶしなどの腹の足しにならない物にも手をつけていた。最終的に『ビオフェルミンＳ』まで口に入れた時、意外においしかった事を覚えている。お母さんが帰るのが遅すぎて、待ち疲れた私はごはんを食べれずに泣きながら寝ることもしょっちゅうだった。「大きくなっても絶対にあんな親にはなりたくない」と常に願っていたが、今でもその思いは変わっていない。しばらくして近所にマクドナルドができてからは五百円玉を机の上に置いていくようになったが、アレルギー持ちの子供の栄養面までは頭が回らないらしかった。一度何かの調査で家のダニの量を検査したときに、ダニの量が満点の結果が出たとお母さんが爆笑していた。今でもアトピーで悩む私にとってはクズのような母親だった。

家庭科の授業中に「きのう家族が帰ってきた順番は？」とか「家族全員の名前は何ですか？」と質問をしあうグループ学習があり、「昨日寝てる間にみんな帰ってきたからわからんわー」などど無理やりごまかしたりしていた。『家族』という言葉が大嫌いだった。

兄弟がいなかったことも、私の心の荒廃に拍車をかけたと思う。自分一人で考える時間は腐るほどあったが、家庭環境を共有できる味方はおらず、心を許せる存在はいつも傍にいるぬいぐるみだけだった。

中学校に上がる頃、お母さんの仕事がなくなり、あちこちパートに出るようになった。お菓子屋さんのレジ打ちやパーマ屋さんの手伝いは結構辛そうだったけど、それでも家族全員が食べていく分には足らず、おばあちゃんのずっと前の代からあった巻物やら古い花瓶なんかを物置から探し出し、何度も質屋に

売りに行く姿を見かけた。しかしながら、お母さんは自分の服代だけは惜しまなかったようで、洋服だんすの中はよそいきの服がはちきれんばかりにひしめいていた。「どこからこんなお金が!?」というような数万円のタグを発見したこともあり、さらなる親への不信感はつのっていった。

そしてお小遣いもほとんど無かった私は、欲しいマンガやお菓子代をまかなうため、お金もうけ作戦をあみ出した。昔誕生日に友達からもらった消しゴムやレターセットなどをメモ帳に書き出し、右側にそれぞれの値段をつけて一覧表を作り、「通信販売するで！」と言っては友達にそれらを売りつけるという商売を始めたのだ。この販売業は高校生の中頃まで続き、それなりに生活費を捻出することができたのだが、「お母さんからやめなさいと怒られた」などという児童が増え出し、ＰＴＡ問題になりかけたこともあった。しかしそれをお母さんに報告すると、「ええ加減にしときや」と一度はたしなめられたものの、「じゃあお金ちょうだいよ」と反撃されるのを恐れたのか、それ以上注意されることは無かった。今思えばよく不良娘にならなかったものである。親は当時の私の友達に感謝すべきだろう。

中学から始まった“お弁当持参”もお母さんは非常に面倒臭がり、ひどい時はごはんのおかずにゼリー、デザートにもゼリーを入れられ、クラスの男子からも「スゲーなあ」といらぬ注目を浴びるほどだった。後に親が出る懇親会で話題にあがったと文句を言われたが、私は「あんたのせいやんか」と聞く耳を持たなかった。

お母さんはおばあちゃんの分も弁当を作っていたのだが、毎回「二百円ね」

と恩着せがましくお金を請求しており、その光景を見るのが辛かった記憶がある。朝ごはんも自分で用意しなければ食べられなかったので、毎日朝食抜きで頭が回らない、典型的な栄養不足の中学生だった。そもそもお弁当を用意するどころではなかったのである。よくテレビで「朝ごはんちゃんと食べないとダメじゃないの」と温かい朝食を前に母親が言うセリフは、本気でドラマの中だけの話と思っていた。

運よく公立の高校に進学したのはいいが、義務教育ではない学費と少なくない交通費もかかるようになり、親からもらう食費は、土日含めて週に千円だった。食堂で食べるのはいつも１７０円のうどんだけで、節約の成果でごくたまに２７０円のカレーが食べれることもあったが、大抵は友達が食べる高価なカツカレーを横目で見ながらうどんをすすっていた。唯一の利点と言えば、所属していた柔道部で、まだ田村だったころの柔ちゃんと同じ階級を維持できていたことくらいだろう。

思春期でありながらもほとんどオシャレができず、クラスの女子たちが色めく修学旅行でさえも２９０円のセーターを着たり、アニメキャラが付いたトレーナーを着て写真に写っていた。唯一お母さんが修学旅行用にと買ってくれたのが、忘れもしないユニクロより安い千円のフリース。当然ながら靴も自分専用のものは買えず、お母さんのおふるのほか、友達からお下がりを安く売ってもらったり、後輩が捨てかけていた靴をもらって履いていた。よく「一人っ子はお下がりがないからうらやましい」と兄弟っ子が言うが、私の場合はむしろ、身内以外を含めてお下がりの回数が多かった方である。

小学校で「倉田は暗い」、中学校で「倉田は笑わない」とからかわれていた私は、この頃になると「なんか背中に取り憑かれてんちゃう？」と言われるほど肩を落として歩いていた。

大学も公立しか受けさせてもらえなかった私は見事受験に失敗し、「私立に行くよりマシ」と再度の公立受験に向けて浪人生活が始まるのだが、そこでもまた、親の放任主義と貧困状況は変わらずに続いていった。

今私は28歳で一人暮らしをしているが、「親と離れてさみしい」とか「心細い」という感情は、愛されて育てられた他の人と比べると極端に少ない。それは私が今まで自分しか頼れないという状況に陥ることが非常に多く、お金のやりくりからゴキブリが出た時まで、すべて自分一人で解決してきたからだと思う。幼いころは振り返ると自分でもかわいそうな子供時代だったと思うが、それがあったからこそ、そのへんの生半可な環境で生きてきた同年代には精神面で全く負ける気がしない。三十近くになってもすねをかじる世代が多いらしいが、甘やかす親も問題だろう。

ここまで書いてきてなんだが、正直に言うと、強い私を作ってくれた親の反面教師ぶりには、ほんの少しだけ感謝しているのである。